

12) 急性腎不全を合併し、透析療法により救命しえた重症急性膵炎の一例

丸山 貴広・林 浩司
姉崎 一弥・堀 聡彦 (県立新発田病院)
原 秀範・関根 輝夫 (内科)

57歳男性。＜飲酒歴＞日本酒4合/日。＜現病歴＞平成10年9月1日心窩部痛出現し、9月3日当院受診。血液検査、CT所見(grade IV)より急性膵炎と診断し入院した。＜入院時現症＞意識清明であったが、ショック、DIC、急性腎不全が認められた。平成8年難治性膵疾患分科会の膵炎重症度スコアより最重症膵炎と診断し、FOY大量投与、ウリナスタチン、CDP-コリン、IMP/CS、dopamineを点滴開始した。腎不全に対し、入院1日目に4時間、2日目に8時間の血液透析を行った。経過とともに血中アミラーゼ、クレアチニン、尿量は改善が認められ36日目に退院となった。本症例は初期血液透析により救命しえたと考えられた。

13) 自己免疫が関与していると考えられた慢性膵炎の1例

土屋 玲・土屋 嘉昭
佐々木 壽英・佐野 宗明
田中 乙雄・梨本 篤
筒井 光広・牧野 春彦 (県立がんセンター)
藪崎 裕 (新潟病院外科)
椎名 真 (同 放射線科)
太田 玉紀・本間 慶一 (同 病理部)

今回我々は自己免疫的機序の関与が考えられた慢性膵炎にステロイドを投与し、症状、画像上改善をみた1例を経験したので報告する。症例は、58歳女性。褐色尿、上腹部痛を主訴に近医受診し膵頭部癌の疑いで当科紹介。CTで膵の瀰漫性腫大、ERCPで下部胆管狭窄と膵頭部における主膵管の不整狭窄像を示し、血管造影では上腸管膜静脈の狭窄を認めた。血液検査所見では好酸球の増加、 γ -グロブリン、IgAが上昇しRA testが陽性であった。以上よりいわゆる“自己免疫性膵炎”を強く疑い開腹下膵生検を施行。術中所見では膵のびまん性腫大・硬化を認め、病理学的には悪性所見はなく、膵小葉内外の炎症性円形細胞浸潤と高度の線維化を認めた。自己免疫性膵炎の診断でステロイドの投与を開始し、臨床症状、血液検査、画像所見上明らかな改善見た。

14) 膵頭部癌に対する経リザーバー的動注化学療法の経験

早川 晃史・飯利 孝雄
渡辺 庄治・杉浦 広隆
柳沢 京介・小林 由夏 (立川総合病院)
大坪 隆男・七條 公利 (消化器内科)

手術不能膵頭部癌6例に対し集学的治療の一貫とし経リザーバー的動注化学療法を施行した。動注薬剤はFEM(5-FU, EPIR, MMC) or PMUE変法(cDDP, MMC, Etoposide, UFT)。5例にAngiotensin-IIを抗癌剤と同時動注。5例に放射線外照射45~50Gyを併用。6例全例に膵原発巣の縮小効果および肝転移巣の抑制を認めたが、腹膜播種抑制効果は乏しかった。死亡4例の平均生存期間は464日、平均在宅期間は331日で、当院での過去5年間の動注非施行群と比し良好な成績を示し、外科的切除群(平均生存期間323日)にも匹敵する成績を認めている。しかし、6例中4例に腹痛、食思不振を伴う十二指腸粘膜病変をみ、継続治療を困難とした点が最大の課題と考える。

15) 血友病Aを合併した進行食道癌患者の1手術例

田中 典生・下田 聡
武田 信夫・坪野 俊広 (県立新発田病院)
伊藤 寛晃・青木 賢治 (外科)

mild typeの血友病Aを合併した進行食道癌患者に対する1手術例を経験したので報告する。症例は72歳の男性で、家族歴で祖父と3人の兄弟が血友病である。既往歴で、6歳の時から4回軽度の切創からの出血が止血されず、40歳の時初めて血友病と診断された。44歳の時急性虫垂炎で手術した際、第Ⅷ因子活性をモニターしつつ、第Ⅷ因子製剤が投与された。今回は、吐血、タール便にて発症し緊急入院。精査にて、胸部進行食道癌と診断された。3領域郭清を伴う食道亜全摘術が施行され、alN0, RII, CIIIのcurative resectionであった。術前には、虫垂切除時の第Ⅷ因子活性の推移を参考にし、凝固因子活性を60%以上に保つことを目標に、術前日より第7病日まで1日2000単位の第Ⅷ因子製剤を投与した。目標のlevelは維持され出血による合併症は認められなかった。血友病を合併する癌患者においても的確な凝固因子の投与により通常のリンパ節郭清を伴う切除術が可能である。